

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第75号

2016年3月

## 日本薬史学会2016年度の主要行事のご案内

編集委員会委員長 西川 隆

2016年2月10日の常任理事会で、本学会の2016年度の総会関連および柴田フォーラムの日程が決まりましたのでお知らせします。すでに決定しております2016年会（東京・明治薬科大学）を加え主要行事の日程などもご案内します。年会の詳細は本学会のウェブサイトなどで続報します。

### ●総会関連

開催日：2016年4月16日（土）12:00より受付開始

会場：東京大学薬学系総合研究棟

- 1) 12:30～13:30 理事・評議員会（10階大会議室）
- 2) 14:00～15:20 総会（2階講堂）
- 3) 15:30～17:40 公開講演会（同上） 資料代500円  
15:30～16:30 日本社会薬学会会長 宮本法子  
「一般用医薬品販売制度の歴史的変遷とくすり教育の必要性」  
16:40～17:40 医薬品医療機器総合機構 テクニカルエキスパート 森本和滋  
「勇ましい高尚な生涯 石館守三博士—没後20年 生誕115年—」
- 4) 18:00～ 懇親会（東京大学・山上会館） 会費4,000円

### ●第9回柴田フォーラム（世話人：京都大学薬品資源学分野准教授 伊藤三千穂）

開催日：2016年8月6日（土）13:30より受付開始

会場：京都大学大学院薬学研究科マルチメディア講義室（薬学部教育棟1階）  
京都市左京区吉田下阿達町46-29 （詳細は2ページをご覧ください）

### ●日本薬史学会2016年会（年会長：明治薬科大学天然薬物学教授 岡田嘉仁）

開催日：2016年10月29日（土）

会場：明治薬科大学（東京都清瀬市野塩2-522-1）

アクセス：西武池袋線「池袋」駅→「秋津」駅下車 / 約25分（徒歩12分）

JR武蔵野線「新秋津」駅下車（徒歩17分）

# 日本薬史学会 第9回 柴田フォーラム開催 ご案内

柴田フォーラム委員長 相見 則郎

日 時：2016年8月6日(土)

会 場：京都大学大学院薬学研究科マルチメディア講義室(薬学部教育棟1階)  
京都市左京区吉田下阿達町46-29

参加費：無料

懇親会費：2,000円(当日お支払いください)

## 〈プログラム〉

13:30 受付開始

14:00～15:20 「江戸の本草学と植物学」  
永益英敏(京都大学総合博物館 教授)

15:20～15:30 休憩

15:30～16:50 「食品着色料とその規制法令の歴史の変遷」  
井上健夫(三栄源エフ・エフ・アイ株式会社 取締役執行役員)

17:00～18:00 懇親会(会場は同じ)

## 〈会場までの案内図(南北が上下逆ですのでご注意ください)〉



### 京都駅から

タクシー 20～25分

または

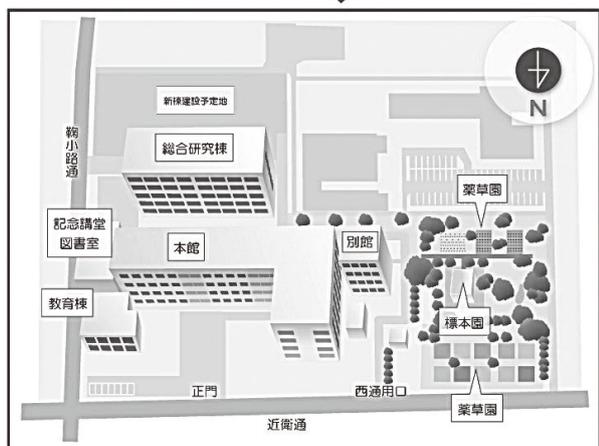
市バス 206系統(東山通り高野方面行き)「近衛通」  
下車 徒歩8分

### 阪急電鉄「河原町」駅から

市バス 201系統(東山通百万遍方面行き)「近衛通」  
下車 徒歩8分

または

四条大橋を渡り、京阪電鉄「祇園四条」駅から普通  
または準急に乗車「神宮丸太町」駅下車 徒歩10分



〈問い合わせ〉

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46-29

京都大学大学院薬学研究科

薬品資源学分野

伊藤美千穂

(michihoi@pharm.kyoto-u.ac.jp)

## 六史学会合同例会で河村典久理事が講演

恒例の六史学会合同例会が2015年12月12日(土)午後2時から順天堂大学センチュリータワー16階で開催された。演者として薬史学会からは河村典久理事が「三重県の本草学者丹波修治」と題して講演した。貴重な標本などが随所で紹介され、フロアからの質問も多く関心を集めた。講演内容は、修治の弟子である浅井平一郎著『丹波修治先生傳』の紹介と三重県川北の旧宅の現況、尾張嘗百社を引き継いだ嘗百交友会の開催など。(概要の一部は本レター75号P6の「中部支部だより」を参照)



## 末廣雅也先生を偲んで

日本薬史学会 高橋 文

本学会名誉会員の末廣雅也先生は、2015年11月14日に永眠された。88歳9カ月であった。先生は東京都出身、旧制成城学園高等科を経て、1945年4月東京帝国大学医学部薬学科入学し、緒方 章教授が主宰する臓器薬品化学教室に入り、1948年3月に卒業され、当時の三共製薬(株)研究所に入社、そして1991年頃、歴史が好きだからと薬史学会へ入会されたそうである。

1991年3月の日本薬学会111年会・薬史学部会で「インスリンについて」の研究発表をされ、それをすぐに薬史学雑誌27巻1号(1992年6月発行)に投稿、原報として掲載されている。その後も薬史学部会、シンポジウム、集談会、年会、講演会で次々に発表・講演を行い、その内容を雑誌や通信(現在の薬史レター)などに掲載された。さらに1992年に始まった「ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」にもほぼ毎年参加され、報告記を綴っている。

入会してすぐに学会事務局の仕事も託され、財務などを経て、1999年頃からは編集委員として、査読制度の導入を試行され、2009～2011年には編集長として専念された。

「薬史学雑誌」が、わが国にある約2500の医薬系



末廣雅也先生

雑誌のうち7%しか収載されていないMedlineに収載され続けているのも格調高い機関誌の発行に心血を注がれた末廣先生の功績と思っている。

また長年、短歌を嗜んでこれ、年4回発行の学士会雑誌(東大)には毎号掲載されていたということである。私自身は、自分の発表や講演について事前に先生に校閲をお願いして丁寧なご指導を頂いた。ハイデルベルグの国際薬史学会で一緒に歩いた哲学の道も懐かしい思い出である。

学問を愛し、穏やかで心豊かな先生のご冥福を心からお祈りする。

## 日・中・韓 国際薬史フォーラム / 日本薬史学会 2015 年会 (奈良) の 翌日に開催された「薬史ツアー」の報告

日本薬史学会関西支部 川崎 元士

2015年11月22日(日)朝8時過ぎ、近鉄「橿原神宮前」駅にある「橿原ロイヤルホテル」に集合し、バスで、晩秋の奈良の穏やかな日差しの中、薬の歴史を巡る1日ツアーが行われました。多くの方は前日に奈良春日野国際フォーラム『甍』で開催された日本薬史学会2015年会(奈良)に出席した余韻の冷めやらぬ中、学会2日目のイメージで参加されたことと思います。

バスは最初に三光丸クスリ資料館(御所市今住700-1)を訪問しました。株式会社三光丸は配置薬の和漢胃腸薬(三光丸)を製造・販売する700年の歴史を有する製薬会社です。クスリ資料館は、三光丸の製造に使われる原材料、製造方法、道具、配置薬の歴史と現状等がわかりやすく学べる楽しいミュージアムでした。また現在の原料倉庫や工場設備も併せて、館長の浅見 潤 氏に丁寧にご案内いただきました。歴史ある医薬品が広大な古い杜に囲まれた近代的工場で製造される様は、古さと新しさが調和した心落ち着く雰囲気を作り出していました。日曜日は休館日ですが、ご好意で特別に見せていただきました。

次に訪問した宇陀市歴史文化館「薬の館」(宇陀市大宇陀上2003)は、江戸時代末期の建築で、薬問屋



資料館内を見学する参加者の皆さん

を営んでいた細川家の住宅を改修した歴史文化館です。細川家は藤沢薬品(現アステラス製薬)の創業者である藤沢友吉氏の母方の里とのこと。細川家で扱っていた薬品や道具類も数多く展示されていましたが、とりわけ当時の大きな木製看板は重厚で、懐かしい歴史を感じました。また古い竈も残されていて往時の生活を垣間見ることができました。

3番目に見学した森野旧薬園(宇陀市大宇陀上新1880)は、「森野吉野葛本舗」の11代目が享保年間に自宅の裏山に開いた、「小石川植物園」と並ぶ日本最古の薬草園です。当初はツアーに入っていませんでしたが、「薬の館」から「大願寺」の途中にあり、短



三光丸クスリ資料館前で説明くださる浅見館長



宇陀市歴史文化館前にて

時間だけ訪問しました。広い旧薬園を散策する時間はありませんでしたが、家のすぐ裏にある葛を製造する設備を見学しました。花の咲く時期に改めて訪問してみたいと思います。

昼食は大願寺(宇陀市大宇陀拾生736)でいただきました。当院は聖徳太子発願の寺とも伝えられ、藤原時代後期の木造十一面観音菩薩立像を本尊とし、薬草料理も有名です。お寺で供される食事なので淡泊でボリュームがないのではと思っていましたが、予想を裏切る美味しさと食べごたえにビックリしました。食後は、大満足の笑顔で皆さん揃って集合写真におさまりました。

本ツアーの最後に法相宗の大本山である「薬師寺」(奈良市西ノ京町457)を訪問しました。680年に天武天皇により発願、697年持統天皇によって本尊開眼して飛鳥の地で堂宇完成。その後、平城遷都に伴い718年に現在の地に移ったとのこと(平成10年ユネスコ世界遺産登録)。

当寺院の宝物管理研究所 録事の加藤 <sup>たいかく</sup>大覺師より、お寺の歴史、建築様式、現在解体修理されている東

塔の分解された部材の説明、更に日々を如何に生きるべきかという真面目なお話まで、面白おかしくかがうことができました。時間が遅くなって夕方をむかえたため、予定していたお寺での般若心経の写経は、各自持ち帰っての宿題となりました。薬史ツアーはこの薬師寺で解散、古都奈良での“薬漬け”の2日間は終わり、参加者は三々五々帰路につかれました。

「まほろば大和」は、“くすり”というキーワードを抜きにしては語れません。古代から現代に至るまでわが国の薬や医療に深く関わっています。本薬史ツアーはそのことを実感させてくれ、2015年會を締めくくるにふさわしいものになったのではと考えています。

年會の開催および薬史ツアーの催行ができましたことはひとえに、奈良県製薬協同組合、奈良県医療政策部業務課、薬師寺、エリシオングループ 株式会社セフティライフ、協賛・広告掲載企業の皆さまのご理解、ご協力とご支援の賜物であります。

最後に年會実行委員会より、関係団体・諸氏の皆さまに深く感謝申し上げます。



大願寺の薬草料理(当日メニュー)



薬師寺参拝前の加藤 大覺師の説明を聴く参加者の皆さん



参加者の皆さんの集合写真(大願寺にて)



薬師寺境内にて

## 日本薬史学会・中部支部例会報告

日本薬史学会中部支部長 河村 典久

① 中部支部例会を以下の要領で開催した。

日 時：2015年12月5日(土) 14:00～16:00

場 所：名城大学名駅サテライト・多目的室

(名古屋市市中村区名駅3-26-8 名古屋駅前桜通りビル13階)

講演会 14:10～

### 演 題 1：「文献と資料に見る感染症」

○ 稲垣裕美(内藤記念くすり博物館 学芸員)

### 演 題 2：「三重の本草学者・丹波修治」

○ 河村典久(中京大学 人工知能高等研究所 元金城学院大学)

参加者は9名と少人数であったが、演題についての意見交換が活発であった。奥田潤先生から『薬史学事典』の案内があり、また、中島路可先生からの特別寄稿『鳥取藩の本草学者・平田眠翁』に関する資料の提供があった。

### 【講演会の要旨】

#### 演題 1：「文献と資料に見る感染症」

○ 稲垣裕美(内藤記念くすり博物館 学芸員)

今回は内藤記念くすり博物館が収蔵する江戸時代から戦前までの感染症の治療方法や薬に関する文献や資料の中から、2016年度に開催予定の企画展『感染症の世界』で紹介する。

感染症は古代から人々の定住化に伴って集団が大きくなり、その集団内で天然痘、麻疹、結核、赤痢、寄生虫症などが流行するようになった。特に灌漑を行い耕作するにつれ、感染症を媒介する昆虫や寄生虫と接触することが多くなり、感染の機会が増えた。中国医学では感染症の対症療法に力を入れ、それを著作にまとめてきた。日本も中国医学をお手本として感染症の対策を行ってきた。今回は特に破傷風や赤痢などについて報告したい。

#### 考察

##### 1. 中国医学の特性

中国医学は西洋医学に比べて病気の原因追及をあ

まり行わず、対症療法にとどまった。例えば破傷風も傷口や臍の緒から邪が入ると考え、その考えに基づいて治療を行っていた。

##### 2. 感染症の対症療法

症状に合った薬の処方多数考案し、症状が変わると薬を替え、鍼灸も合わせ、解熱、下痢に対してもきめこまかく対応を行った。例えば赤痢では白頭翁<sup>ハクトウオウ</sup>を治療薬に用いたほか、19世紀の『滯下方論』(小懸公器著)では便器を改良したり、便壺にニンニクやドクダミを入れる、空腹時に患家を訪問しないなどの対策が提唱された。

##### 演題 2：「三重の本草学者・丹波修治」

○ 河村典久(中京大学 人工知能高等研究所 元金城学院大学)

丹波 修治、名は公憲。字は之翰。修治はその通称で、退翁、菅屋または清風と号した。文政十一年六月十六日尾張国愛知郡前田一色(現在の名古屋市中川区下之一色)に木村和平の次男として生まれ、明治四十一年十二月十二日、川北村の本邸において八十一才で没した。

修治は十代の後半、伊藤圭介の下で本草学などを学んだが、尾張嘗百社の中で盛んに作られていた印葉図(墨などを用いて植物の形を紙に写したもの)についても興味を示し、丹波修治は自らも印葉図の作成を行っており、現在十四点知られている。『植物真影』(縦長資料)には七十六種類の植物印葉図がある。このうち六十四の植物は杏雨書屋所蔵の『おしば画』と全く同一の植物であり、『真影雑草之類』では十五植物について同一のものである。

旧宅から百メートルほど離れた朝明川堤防付近には明治四十四年七月に建てられた巨大な顕彰碑があり、碑文には修治の出生から功績について記され、篆学には、『丹波退翁碑』とある。

丹波修治から直接指導を受けた浅井平一郎は、明治二十九年、齢十七歳で修治宅に寄学してから、公私共に修治から本草研究の指導を受けるに至り、嘗百社交友会に関する資料によると、詳細な記録から三十一回に及ぶ博物会の出品リストを紹介している。

## ② 日本生薬学会第 63 回年会のお知らせ

中部支部北陸地区の富山大学・小松教授のもと、表記の学会を開催されることになっています。日本薬史学会員の参加をお願いいたします。年会連絡事項および詳細は決定次第日本生薬学会第63回年会ホームページに掲載される予定ですので、ご確認をお願いいたします。

### 【開催日・場所】

平成 28 年 9 月 24 日(土)、25 日(日)、富山国際会議場 総会、会長講演、特別講演、シンポジウム I、一般講演(口頭、ポスター)、受賞講演、シンポジウム II、一般講演(口

頭、ポスター)

懇親会：9 月 24 日(土) 18 時 30 分より、会場：ANA クラウンプラザホテル富山

### 【事務局連絡先】

日本生薬学会第 63 回年会事務局

〒930-0194 富山市杉谷 2630

富山大学和漢医薬学総合研究所 生薬資源科学分野  
年会会長 小松かつ子

Tel：076-434-7601 FAX：076-434-5064

E-mail：jsp2016@inm.u-toyama.ac.jp

## 大村 智博士のノーベル生理学・医学賞ご受賞を祝う

評議員 八木澤 守正

北里大学特別荣誉教授 大村博士のノーベル生理学・医学賞受賞は、日本人では三人目であるが、感染症治療薬の発見という薬学領域の研究での受賞は初めてであり、薬史学の一里塚となる快挙である。大村博士は日本薬学会の名誉会員であり、1986年に日本薬学会から「マクロライドをはじめとする各種抗生物質に関する総合的研究」に対して学術賞が授与されており、1990年には「生物活性を有する微生物代謝産物、特にマクロライド抗生物質に関する研究」に対して日本学士院賞が授与されている。

大村博士のノーベル賞受賞講演のタイトルは“A splendid gift from the Earth: the origins & impact of Avermectin”とされており、若手研究者に対し

て日頃より「微生物に敬意を表しなさい」と啓発しておられる大村博士の微生物産物に対する思い入れを如実に示している。大村博士は微生物が産生する新規物質を500以上発見し、それらのうちの25以上の物質が医薬・動物薬・試薬として市販されており、それらの微生物産物の発見・化学構造・生物活性などの詳細が業績集として刊行されている。そのような多種多様な微生物産物のうちで、16員環マクロライド構造を有するイベルメクチンがアフリカの数億人を原虫病の脅威から解放したことが高く評価され、今般のノーベル生理学・医学賞の受賞となったのである。

(慶應義塾大学薬学部)

### 〔Book紹介〕

神原秋男 著

## 「言葉が紡いだ薬事ノート：医薬時評 & 言葉が動かす医薬の世界」

A5版 405頁 1,800円 (医薬経済社)

本書は、2015年10月刊行された。第I部は、雑誌「医薬経済」に2005年～2008年に掲載された内容を、そのまま本書に収録されたものである。第1章の「治験問題」に始まり、新薬審査と承認、医薬品情報とマーケティング、薬物療法の進展、後発品時代への歩み、一般用薬の販売体制、そして第7章「医薬品産業の課題」から構成され、薬言子(筆名)の名前で、「疑問に思う」、「危惧する」、「期待する」など、忌憚のない意見が大胆に

述べられている。薬史学会員にとっても興味深い内容かと思われる。第II部は、薬事用語の解説(アンメット・メディカル・ニーズ、エグゼンプト・ドラッグ、クリニカルパス、コンパッションエート・ユース制度、ドラッグ・ラグ、バイオシミラー等を含む63件)で、医薬品の開発、治験、承認審査過程を学び始めた学部学生や大学院生にも、薬事用語を理解し、自らの考えを醸成する有用な教材となることが期待される。(森本和滋)

# 薬史往来 絵画に見る、医学薬学発展の歴史

— 米国発 ; Great Moments in Pharmacy —

神戸学院大学 薬学部 前田 光子

神戸学院大学薬学部の廊下に、薬学の歴史に関する一連の絵画40枚(印刷体)がかけられている。薬剤師に関する出来事が、時代を追って描かれたものである。画家名の他、シリーズのタイトル『A HISTORY OF PHARMACY IN PICTURES』と、クロロマイセチンで世界に名を馳せた PARKE-DAVIS社の提供であることが読み取れる。1枚目のタイトルは『BEFORE THE DAWN OF HISTORY』: 石器時代の洞窟内、湿布で手当している様子が描かれ、その頃から薬剤師の祖先は人々の中でプライドある役割を果たしていたことが説明文に記されている。続く39枚の絵の概要をキーワードで抜き出してみると、神農、薬局方制定、神官・医師・薬剤師の分離独立、薬剤師会発足、薬剤師教育、分析技術、生物学的製剤、抗生物質の発展等である。絵にはそれぞれ背後に史実に基づいたストーリーが秘められている。モルヒネを単離(1804年)したゼルチュルナーは友人3名との効果実験の様子が、またアメリカ薬局方の制定(1829年)に

貢献したスクイブは、実験中の事故で失った右腕が少しくヒラヒラしているのがわかるだろう。

絵は1951年からParke-Davis社発行のModern Pharmacy誌に挟み込みで提供され、たちまち人気をくし、全米の薬局はこぞって店内に飾った。作者は、薬剤師でジャーナリストのGeorge A. Bender、起案してから苦節数十年の後、画家のパートナーRobert A. Thomを得て発行までに至った。時代考証に忠実に、背景の瓶の形にまで徹底的に調査され描かれた。ミスが見つかった場合、例えばキニーネ単離(1820年頃)の絵では、濾過装置が時代に合っていないとの指摘を認め、発行後ながら修正を行っている。

同BenderとThomペアで1957年から45枚の『A HISTORY OF MEDICINE IN PICTURES』が作成され、後に両シリーズを合して『Great Moments in Pharmacy』が出版された。

閑話休題、日本の薬史をおよそ40枚の絵に表すとすればどのような案が出てくるだろうか。

## 編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定および理事・評議会の承認により経費削減のため、本号の「薬史レター」からEメール配信に原則切替えました。日本薬史学会ホームページ上に新刊薬史レターが開けるアドレスを記載しておきますのでクリックするとご覧になれます。また、発行回数は年4回を2回とし、1号のページ数は原則8ページ以内で発行しています。これで経費は大幅な削減が見込まれます。ご意見をお聞かせ下さい。

## 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第75号 2016年3月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp